



第31号
令和元年10月12日
発行
熊本中地区高平
2-20-35
曹洞宗 浄国寺
編集者
中山 義紹

浄国寺企画 いま心にZEN 開催案内

浄国寺恒例企画

いま、心にZEN

令和元年十一月十六日(土)

午後五時 講演会

南島原市 玉寶寺住職 薬剂師

(九州大学薬学部修士・駒澤大学仏教学部修士)

太瑞たいすい(中村) 知見 老師

演題 「お釈迦様の薬箱」

午後七時 「お寺でジャズ」

ジャズ 鈴木 良雄&Bass Talk

定着してきました

お寺は誰か亡くなった時に供養して貰うところと言ったのが一般の方のイメージだと思えます。それも、お寺の重要な務めです。しかし、仏教に限

らず宗教は人が如何に生きるべきかの指針になるものだと思います。「辛い」「死にたい」「どうやって生きていくか」。人は、いつも悩み、苦しみなながら日々を送っ

ています。そんな時に、お寺で静かに坐る事で、何かが見えてきたり、明日からも生きていこうと力を貰える事も有ります。私は、僧侶として、お寺を そんな場所にしたたいと若い頃から考えていました

最初は、私の好きなジャズを通じて、お寺の敷居を低くしたいと始めましたが、折角なら、生きる為のお話しが聞ける場所にしたたいと思ひ、講演会等も一緒にやる事にしました。

お釈迦様の薬箱

お寺のお説教と言え、その宗派の教えに偏りがちです。カトリック教会の組織の中に

「諸

宗教対話」の部署があり、玉名郡の和真命山(教会な



のに山号があるところが柔軟性を感じますが」という教会で、活動をされているイタリア人のフランク・ソットコルノナラ神父様と親しくできる御縁を頂き、カトリック中央審議会主催のパネルディスカッションなどにも私も呼ばれて参加するようになりました。フランク神父様も、私の意図をご理解頂き、当山の企画に参加して「坐禅」と「カトリックの瞑想」の相違点などについてのディスカッションや、イタリア人の神父、アメリカ人の曹洞宗の僧侶の対談なども行いました。真命山では、二年に一度色々な宗教(キリスト教、仏教の諸宗派、日本神道など)一堂に会して「世界平和を祈る」イベントも行われています。その場で、同じ曹洞宗で顔を合わせていたのが中村(太瑞)と言うのは道号です)知見師でした。柔軟な感性と論理的な思考を持つお坊さんだなと親しみを覚えていました。後日、彼が薬剂師であり、「お釈迦様の薬箱」という著書もある事を知り、

お寺でジャズ

昨年、都合が叶わず、今年開催となりました。話を聞くと学部は違いますが、同じ大学の先輩後輩という間柄に驚きました。早速、彼の著書を購入して、読んでるところ、大変面白く、今から話が楽しみです。

この企画も、気づいたから十年を越えていました。そして、最初の年から、ずっと企画出演して戴いているのが、ベースの鈴木チン良雄氏です。この方の1.5リターダールバム(まだ三十cmの黒いレコードでした)を聞いて、ロックバンドでエレキベースを弾いていた私に、ウッドベースに転向する契機となりました。またまた熊本でライブをされたときに知り合いになり、毎年私の好きなジャズマンを引っ張ってライブを行うようになりまし。今年来て頂くのはBassの「TAK」というチンさんといつも一緒に演奏するグループで、結成十八年、平均年齢は六十歳を越えるベテランメンバーで、全員、自分のグループを



持ちアルバムを出している方々です。連続三年目の出演になります。今年も新譜を出したばかりで、いつ

も以上に気合が入っています。きつと素晴らしい演奏を聴かせてくれると思います。ジャズと言え、近頃は食事処のBGMのイメージが強いのですが、本来は生の演奏こそジャズの醍醐味です。



曲がり角を曲がり損ねた国日本

当山の木曜坐禅会、現在も初めての坐禅体験を求めて、参加される方が、毎週数名来られます。私は「坐禅というものは即効性の効果を求めても何も得るものはありませんよ。それで良ければ、どうぞお出で下さい」と説明しますが、「兎に角一度 坐つてみたい」と言つて足を運ばれます。何故、坐禅をしたい人が増え

たのか？色々といつも考えます。近頃、一つの心理療法として、坐禅をベースにしたマインドフルネスというものが、ヤブーやグーグルの社員研修でも取り入れられています。アップルの創始者のステイブ・ジョブズが曹洞宗僧侶の鈴木俊隆老師の指導を受けて禅に傾倒していたのも有名な話です。しかし、それならば一過性のものに終わるでしょう。坐禅会に参加される方の動機を尋ねると、流行に惹かれた訳ではないようです。では、何故、坐つてみたいと思つたのでしょうか。グローバル化の台頭や社会の二極化の進展は大きな理由のようですが、今まではとされてきた価値観の喪失と自分自身の喪失感が大きいようです。「良い大学を出て、良い会社に勤めてお金持ちになる事が幸福である」という考え方が成立しなくなつてきているのが今の日本社会です。



れば良いのか？自分は、何処に行きたいのか？それらが全く見えなくなつています。仕方がないので、眼の前にある諸問題を片付けるしかないのが日常です。又、国を動かす政治家や官僚も判断基準が近視眼的な対処療法に終始して、大局的な見方をする事もなくなつていきます。そんな日常の中で、自分が何をしたいのか、何をすべきなのか分からなくなつていきます。禅語に「脚下照顧」という言葉があります。自分の足許を振り返つて見つめ直そうという意味です。我々は、今という現在を生きています。明日は思い通りにはなりません。過去をやり直す事もできません。それでも、今生きている現実と生きていく命は大切なものです。国や政治が何をしてくれるかは誰も想像できません。しかし、自分の頭が勝手に作り出した自分の理想とそれが叶わない現実とは、厳然とした事実です。勝手に作った絵柄とそれが叶わない事による自己喪失感に振り回されたくらいものです。損得勘定で近視眼的に決まつていく傾向は、今の日本では愈々甚だしくなつていま

す。二極化の中で、国を動かすエスタブリッシュメントが、もう少し考えていたら、少しは違つていたかも知れませんが、綺麗事を大事なものと考えず、馬鹿にして軽んじてる日本になつた。つまり、損得勘定（禅語では、名聞利養と言います）が優先順位の上位になつてしまつた日本では、一人一人が脚下照顧して坐る事が自然なのかも知れません。

納骨堂を改装しました

築十五年を過ぎ、表の壁も傷んでいたところに三年前の熊本地震で亀裂も入っていました。鉄骨造りなので、亀裂から水が浸みたら手遅れになると考え、壁を塗り替えました。同時に、納骨堂を庫裏（住居部分）の玄関と勘違いする人もいたので、新に看板を作り直した。先祖が居るから、自分も居る。その感謝の気持ち



つづく日本の伝統は大切にしていきたいと思ひます。

娑婆は娑婆
十月から幼児教育・保育の無償化が始まつた。最初は教育部分の無償化の筈だった。人がより良く生きる為には、自分の頭でしっかり考える能力が必要であり、教育とは、その力を育む事だ。そのためには、育つ環境（貧富も含め）に関わらず、教育を受ける権利があり（保護者には義務があり）、その保障が教育の無償化だ。日本は、OECD諸国の中で教育にかけられる公金の額は、最低レベルだ。生きる力を最も育む適齢期が幼児期で、少しは益しになる事を期待した。しかし、子どもは教育機関だけで育つ訳ではない。家庭も重要な教育の場だ。同時に教育は技術の習得ではなく、日常で身につくものである。厚労省が強いのか文科省がへたれなのか、教育でなく福祉（つまり親へのサービス）である保育も無償化になつた。これでは、家庭の教育力は益々下がり、子どもの健全な発達に影響が出る。必要な所に手厚い保護をするのが福祉の筈だ。一律に保育を無償化するれば、労働力としての女性の確保には繋がるだろう。それだけで良いのか？子どもの成長に与える影響は？「タダなら長く預けた方がお得だ」の自分のすべき事を忘れかけたママ達の声の中で悩む日々だ。

定例木曜坐禅会

毎週木曜日 午後八時より 当山本堂にて
一炷（約四十分）坐禅をして、坐禅に関する著述の解説（約二十分） 会費・会則一切なし、初めてのの方はご連絡下さい